

チ発。ところが貨車は西進、一月二十八日チタ着

〃 三月二十三日 チタ発

〃 三月二十五日 アマザール着

〃 三月二十六日 アマザール発

〃 三月二十八日 再度チタ着

〃 四月十七日 チタ発 二百人

〃 四月二十三日 ナホトカ着

〃 四月二十八日 収容所入り

〃 五月二十四日 ナホトカ発 乗船

〃 五月二十七日 舞鶴入港

〃 五月二十八日 日本本土舞鶴上陸

〃 五月三十一日 舞鶴発

〃 六月一日 帰宅

収容期間……約二年

(十一) 帰国後の生活

シベリア抑留の苦難は人生によく試練だと思っ
た。幸い、東京電力㈱に入社できて無事定年退職
し、現在は息子の時代で（市役所勤務）、妻と平

穩に暮らしております。

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

主義主張は違っても戦争は絶対にしないこと。

国民にもっと道徳教育をしてほしいこと。

個人に対し、社会に対して責任のある人間になっ

てほしいこと。

抑留中の労苦記録

山梨県 青木和夫

(一) 出生から入隊まで

①どこで出生……静岡県沼津市大岡下石田

②いつ出生……大正十五（一九二六）年十一月二十

八日

③学校……尋常高等小学校―旧制中学校卒業

(二) ソ連軍侵攻前

①いつ入隊……昭和二十（一九四五）年五月

現役・召集

② 入隊場所……牡丹江省穆稜第八〇二部隊第一機

③ 駐屯地……鏡泊湖の山中陣地構築

戦地……満州鏡泊湖畔

(三) ソ連軍侵攻をどこで受けた

① いつ……昭和二十年八月九日

② どこで……満州東滿総省鏡泊湖山中

③ どんな状況で……いよいよ戦争にとり八月九日、すべての私物は捨て、米と塩のみ持参して重

機かつぎ山中へ出発。

(四) 終戦

① 詔勅……全然聞いておりません。

② 感想……軍旗受領に五月行ったばかりなのにもう焼き捨てたという情報が十六、七日頃あり、何も分からぬまま過ぎす。初年兵のため。

③ どう終戦したか……重機を馬小屋の下に埋め、帯剣は牡丹江ですべて捨てて。

④ 武装解除から収容所入まで……牡丹江飛行場で編成替えあり、他中隊の生き残りの兵隊を吸収して二千人となり、一列車に釜の支度をして一週間か

かってピロビジャン地区オブルーチェへ。ヒンガンに六百人、選抜の体の丈夫な兵隊のみトラックで出発。着いた所は、天幕を張り三百人ずつの宿舎。九月二十日頃。

(五) シベリア抑留地への移送

① いつ頃……九月十日頃

② この地点からどこへ送られた……牡丹江飛行場からハバロフスク經由ピロビジャン地区へ

③ 東京ダモイと騙され家畜貨車で……千人一車両何日くらい……七日くらい

④ 第一次入ソ場所……ピロビジャン地区オブルー

チェ

いつ……九月中旬

(六) 抑留地の生活

① 第一次収容所どこ……ピロビジャン地区ヒンガン収容人員……六百人

② 生活の様子……天幕生活で十月から十一月と一日ずつ寒さが増してゆく。

住まい……ログハウスを自分たちで作る。

食事……一日三回だが、余りの少なさに井戸端で水を飲みつつ寝る人も。

仕事……すべての仕事にノルマが課せられる。

衣服……凍傷にならぬように特に足の保温に

入浴……石を焼いて水をかけ、サウナのように入る。

シラミ……ドラム缶の火で振ればバチパチと飛び出すくらいの多さだ。

南京虫等……ノミが多かった。

③作業の状況

主作業……錫の鉱山勤務、その他ファーマリカ作り（工場）、伐採、水道管敷設、家屋造りなど。

ノルマ達成状況……五〇%できず。

④給与……三年目から、山の鉱石を持って来て、叩いて水で流し錫のみにして売却、それで給食以外の食料を買って生活する。

（七） 労役

①どういう労役についたか……水源地、伐採、錫の

鉱山

②収容人員……六百人、ヒンガンのみ。

宿舎……二棟建てる。

③冬最低温度……零下三八度、火に当たっている方は熱く、背中は凄く寒い。

冬はどうして生活したか……夏と同じ作業をした。

④労役の時間……夏冬八時間

⑤労役に堪えられない者はどうされたか……営内の軽作業か入院（他のラーゲル）へ。

⑥常日頃健康を保つ上で役に立つことは……何でもかまわず山野草などを食べた。

⑦衣服について扱われたことは……パンツ、褌はなし、袴下をはいてズボン。

（八） 抑留者の統制管理

①労役につく基準……将校がいた頃は将校任せ。兵隊になってからは、各班長との話し合いで。

②労役免除……なし。何らかの軽作業あり。

③健康管理……凍傷だけは皆で注意し合っただ。

④ 点呼・作業場への出入……朝夕必ず点呼あり。警戒兵は必ず帰りまで付いた。

⑤ 食事の状況……『平和の礎』の通りで、毎食毎食が戦争のようだった。

⑥ 休日……一週間毎に休み。

⑦ 収容所施設、構造……ログハウス造り二棟。三百人×二収容の大きな家。寝床は二階。

⑧ 洗脳教育……原始共産時代から共産主義までよく勉強させられた。

⑨ 収容所生活全般……バラ線三重の垣根、四隅に歩哨二十四時間。

(九) 抑留中の生活と極限状態

① 乗りこえてきた信念……故郷に帰るまでは絶対に無駄死はせぬと、お互い仲間同士で励まして過ごした。

② 生死の境、死に直面したときの感想……昭和二十年十月のある月夜の晩、四人で脱走を企てたが、月を眺めて中止した。遠山、福井、佐藤と。その前日、佐々木君殺される。

③ 心身を支えた工夫……アルミを溶かしスプーン、フォークなどの小物を磨いてきれいに作り上げ、気を紛らわす。

(十) 帰還

① ダモイをいつ、どこで聞いたか……ピロピジャンで講習聞いているうちにダモイの指示あり。

② 集結地……ナホトカ

③ 乗船人……遠州丸

④ 船内生活……大分若手と年寄りの間で採めた。

⑤ 上陸地……舞鶴港

⑥ 収容期間……昭和二十年九月―二十三年八月、三年間

(十一) 帰国後の生活

各所を転々として七回も職を変えざるを得なかった。

勤務先の倒産、主人の死亡などのため、四十歳以後、食堂の経営に踏み切り、人並みの生活ができるようになった。(東海食品―オガ屑の運搬―ゴムテープの製造―熱海のソバ屋―遠山織物(白血

病)―運送屋―義勇軍の挫折を経てだるま食堂を
開業)

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

戦争の悲惨さという事実を目の前に見て、二度と同じような運命をたどりたくない気持ちでいっぱいです。終戦直後のソ連の行動たるもの、筆舌に尽くし難い状態でした。目の前を通るシベリア鉄道の貨車の中には我々が築いた尊い財産、家具は言うに及ばず、豊から箒、またアンペラまで山のように積んで西の方へ毎日のように走る。今でも目に焼きついています。その上、捕虜を厳寒のシベリアの地へ何十万人も送り込み、自国の復興のため強制労働で酷使し多くの戦友の命まで亡くし、地獄のような生活を強いられ、帰国してもその後、後遺症に悩んだ人も数多くおりました。

抑留中の労苦記録

山梨県 渡辺清士

(一) 出生から入隊まで

- ① どこで出生……山梨県南都留郡河口湖町浅川
- ② いつ出生……大正十三(一九二四)年八月一日
- ③ 学校……船津尋常高等小学校高三卒業

(二) ソ連軍侵攻前

- ① いつ入隊……昭和十九(一九四四)年十二月一日
- 現役

② 入隊場所……東部六部隊第五中隊

③ 駐屯地……北支青城(という町名)

(三) ソ連軍侵攻をどこで受けた

- ① いつ……昭和二十年八月十五日
- ② どこで……北朝鮮

③ どんな状況で……兵器を興南女学校へ収めた。

(四) 終戦